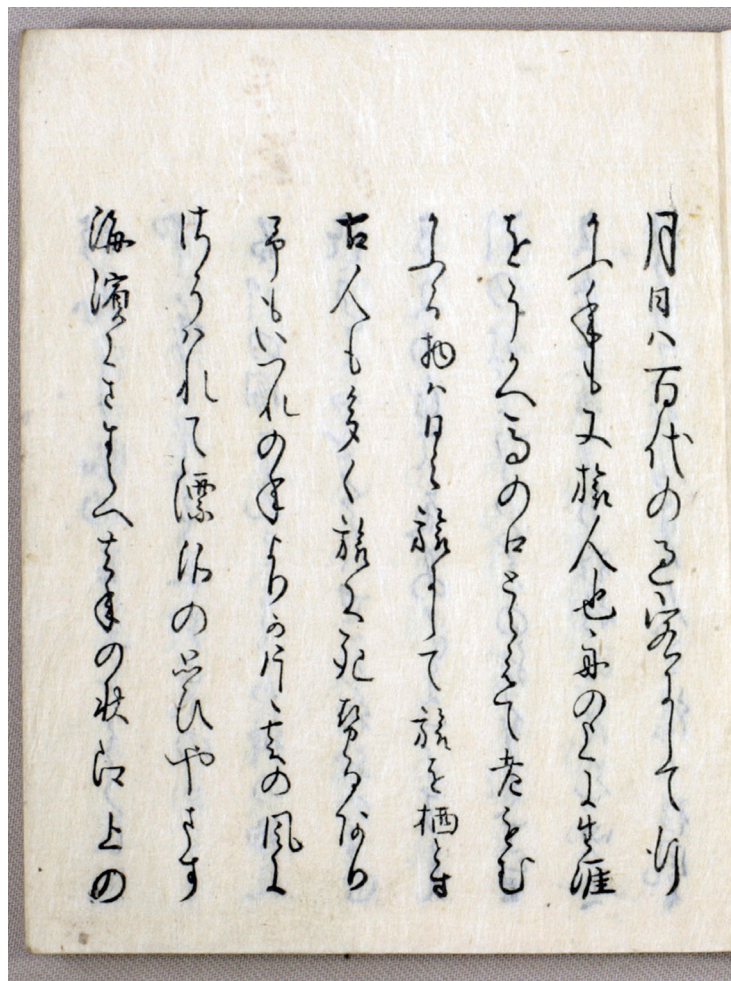


連歌から俳諧へ



* 小田家文書（柳井市金屋）和漢90「おくのほそ道」の冒頭部分。有名な、「月日は百代の過客にして行かふ年もまた旅人なり」で始まります。小田氏が1823（文政6）年に京都で購入したものです。

解説

正統の連歌から分岐して遊戯性を高めた俳諧連歌は、江戸時代に入ると松永貞徳によって大成され（貞門派）、幕府歌学方をつとめた北村季吟らを輩出しました。その後西山宗因を筆頭に「談林派」が隆盛となり、さらに松尾芭蕉があらわれて「蕉風」とよばれる芸術性の高い句風を確立しました。

松尾芭蕉の登場により発句（最初の句）の独立性が高まり、発句の五七五のみを鑑賞することも多く行われるようになりました。この流れは、明治時代に成立した俳句へとつながっていきます。

当館の小田家文書（柳井市金屋）の和漢書のなかには、このような「連歌から俳諧へ」の流れを具体的にたどることのできる資料があります（下のリストを参照）。

- * 「貞徳紅梅千句」（小田家文書（柳井市金屋）和漢114）は、松永貞徳らによる俳諧の連句集です。貞門俳諧の到達した頂点を示しています。
- * 「山の井」（同文書と漢103）は北村季吟著の季寄（歳時記）です。季吟の古典的教養と俳諧の実作とが融合した、すぐれた俳文とされています。
- * 「西山宗因釈教俳諧」（同文書と漢101）は西山宗因の俳書です。談林派は最盛期は短かったものの、井原西鶴や松尾芭蕉らの支持を得ました。芭蕉は「去来抄」で、「宗因はこの道の中興開山なり」と述べています。
- * 「おくのほそ道」（写真）は芭蕉が弟子の河合曾良を伴い、1689（元禄2）年に江戸をたち、東北・北陸を巡り岐阜の大垣まで旅した俳諧紀行文で、芭蕉の代表作とされています。